

左翼思想に対する軍（憲兵）と政府（警察）の密接な探索は日ごとに強まって、少人数の会合も容易にひらくことがむずかしくなり、ますます運動は開かれず進められずという情勢に追い込まれ、そのうえ生活の窮迫はひどくなり、それを支えるために大部分の精力が割かれるという状態にしいに追い込まれることとなった。

昭和九年四月の第十六回中央執行委員会について二見敏雄の次のような発言を見るに至った。

「この状態の中にのほほんと手をこまぬいてはわれわれ自滅を待つばかりである。合法的な生活手段で、ただ今日を生きるために精力を費しているばかりでどうして革命などに近づけるのか。われわれは、食うか食われるかのたたかをやっているはずだ。手段などえらんでいる時じゃないだろう。何をやるべきかは討論されつくしたじゃないか。それをやるためにはまず軍資金獲得のために真先に全力を尽そうじゃないか。自分はつよくこのことを提案する」

それについて植村の意見はこうであった。

「その必要は認める。だが手段をえらばなかったら、そのために何もかも破滅して、手段のために、目的までフイにしてしまうことになり、われわれの思想や行動そのものが誤解と中傷のなかにさらされるだろう。われわれの運動が挫折してしまうことはやむを得ないが、思想や行動を誤解されることは後々まで無政府主義運動のために悪影響を残すだろう。今までもアナキストといえ、暴力主義とかテロリズム一点張りのものと誤解されて苦しい思いをしてきているではないか。それも黒色青年連盟以来の手段をえらない行動によるものといってもよいくらいだ」

二見はやや興奮して叫んだ。

「後世に誤解される？ 君はまだ何十年も先までわれわれの運動が残ると思っているのか。たた

かいはもう始まってしまっているんだ。勝つか、敗れるか、ただそれだけじゃないか。そのたにかいに勝つことだけがそのような誤解をなくするんだ。敗ければ何をやっても誤解される、いやあらゆる悪罵の対象にされるだけだ。われわれは何十年先のために革命をやらうとしているのではなくて、今日只今、われわれの上にのしかかっているこの国家とその権力、この圧力を打ち砕かねばならんのだ」

そうして数時間、このことについてはげしい討論がつづけられた。そしてそのゆきついたところは結局特務機関を党直接の命令系統から切りはなして、党の目的のために独自の行動をとるものとするということであった。

そしてこの特務機関の責任者たらんことを二見敏雄が熱心に申し出て、その決定をしたのであるがこのときの中央執行委員会が党としての有機的な連絡をもつ活動の最終のものとなったのである。というのは、特務機関責任者としての二見は、その後中央執行委員会に出ても、特務機関の行動については具体的には何一つ報告するところがなかった。それはその行動の性格が隠密を要するものだったという実際上の必要のためだったのではあろう。後にわかったことであつたが、二見はその後、相沢、井上、小林、三井、浅倉、寺尾らをひそかに特務機関に吸収して熱心に活動をつづけていたのである。いいかえれば党は党のなかの一部活動分子を特務機関に引き抜かれ、引き抜かれた彼らはそれまでのポストから実質的に手抜きして特務機関の活動につかざる

を得なかつたのである。だから後にのこつた党員たち植村、入江、田所、伊藤、梅本らはとぎれとぎれの連絡をとりながら、労働組合や文化団体に働きかけるという仕儀に至つたのである。しらずしらずのうちに、特務機関は党からその主力の部分を掘って独立したかのごとき奇妙な主客転倒の組織形態となつていたのであつた。このことを特務機関所属者以外の者がはつきりと知り党の具体的勢力とその全貌がのみ込めたのは、特務機関の活動に基づいて全国的な一斉検挙（昭和十一年十一月十日）となり、その一年後の公判廷においてであつた。

後に明らかにされたこの特務機関の活動は大体次のようなものであつた。

まず昭和九年のはじめごろ相沢尚夫と寺尾実が植村の手紙をもつて、大阪に、解放文化連盟員であつた詩人小野十三郎を訪ねた。小野はそのときいくばくかの資金を提供した。相沢と二見とはこの金を一挙に拡大しようと考えて兎町で短期取引に手を出して失敗、すっかりすつてしまつた。そこで責任感とあせりから、もと解放劇場に加わつていた森谷時子を説得し、資産家だった彼女の家から大金を拐帶させようとしたが、これまた、はじめは森谷も承諾しながらついに実行せずじまつた。こうして彼ら、特務機関の活動は早々に非合法の領域にふみ込んでいった。

その当時坪田吟一郎が東京市役所の地理課に勤務していたので、彼に所内のいろいろな調査を命じて、職員俸給の強奪をくだつたのであるが、坪田がその調査に未熟かつ熱意を示さず、これも発動するまでに至らなかつた。

後に植村諦は、当時の党の情勢を回想して「いきおいの赴くところとどめようがなかったらしい」と書いていたが、そのとおりで、彼らの活動の手はかくして関西に伸びたのである。

当時神戸にいた芝原淳三に、党の武装のため必要な拳銃の購入について井上信一によって交渉をすすめていた。たまたまF氏なる人物から相沢尚夫が一挺の拳銃と実包百発を手に入れたので、これを用いてどこかでごっそり強奪しようとして二見敏雄はこう考えて、実行に着手した。

神戸に住んでいた井上信一と小林一信の二人に神戸市内での適当な強奪の場所の調査を命じておいて、二見敏雄は神戸に向かった。

その井上、小林の二人から二見は神戸に着いてから、彼らのひそかな行動の一端が関西のアナキストたちの間にもれているということを聞かされておどろいた。そして、これは芝原淳三からもれたにちがいないと推定した。芝原は、井上、小林を通じて入党していた神戸のアナキストであった。

二見ら三人はそのことについて協議したが、井上信一は、

「芝原は口の軽い男だから、われわれが事を決行した場合、きっとわれわれのことをもらすだろう。それは危険だ」

といい、二見もまた、

「これは党の防衛のためにも、党の規律を維持するためにも、この際厳重な制裁を加えることが

必要である」

ということを強調した。それから二見、井上、小林の三人は秋のピクニックにといつて芝原を誘い出した。昭和十年十月十八日のことであった。四人は日本酒の一升瓶をたずさえ、落栗をひろったりしながら、布引の滝の奥ふかく、麻耶山を登っていった。程よい場所を見つけて四人はしばらく酒を汲みかわしていた。

そしてとつぜん二見がきびしい顔になっていった。

「おい、芝原、おまえは、おれたちの計画をもらしたな」

「いや、そんなことない。絶対にない」

と芝原はつよく否定した。

「ウソつけ、はっきりいわぬと制裁を加えるぞ」

そういい放った二見は、ゆっくりとポケットからピストルをとり出した。それを見て芝原ははげしくいった。

「そんなものでおどかさず気か、おれだってアナキストだぞ、仲間を裏切ってたまるか。さあ、撃て！ アナキストらしく撃って見ろ！」

興奮した芝原はそういうなり、上衣を脱ぎ、上半身をはだかになって、二見の前に突っ立った。二見は芝原をにらみながら冷く笑いをうかべていった。

「冗談じゃないぞ。はっきりいわなけりゃ、ほんとうに撃つぞ！」

「撃つなら撃てっ、撃って見ろ、早く撃て！」

二見の前に立ちはだかつて芝原は詰めよった。二見はそういわれてちゅうちょするような男ではなかった。

「よしっ、三千の同志のために、貴様を制裁してやる」

二見は冷やかな表情で拳銃をとり上げ、しずかにねらいをつけて、引金をひいた、が「カチッ」というただけで弾丸は出なかった。

前に、この麻耶山中で試射した時はりっぱに発火したのに、何故だ、といぶかしんだ二見は、そこにしゃがんでピストルの分解をはじめた。後に公判廷で陳述したところによると、分解、点検、組立て、この間三十分もかかったが芝原はそこに同じ姿勢で突っ立って、二見の手もとを見つめていた、ということである。逃げようと思えば逃げられたはずなのに、芝原は何故か、逃げなかった。命をすてても自分の潔白を証明しなかったのであろうか。あるいは観念した上のことであろうか。修理を終えた二見は、立っている芝原にふたたび狙いをつけた。一瞬、ごう然と一発、また一発、芝原は倒れずにしばらく立ったままであった、その芝原の裸体の胸から赤い血がすすじたたるとともに彼はがっくりと前に倒れた。

三人は死体を、すこしはなれた雑木の藪のなかに捨てて、いそぎ山を下りた。裸になった死体

が、やがて腐爛して、何者だかわからなくなるだろうことを期待したのであろう。

二見は裁判長の間に答えてこういった。

「気の毒な、かわいそうなことをしたとも思ったが、当時の情勢のなかで、党とその組織をまもるためには止むを得ないことであつた」

また、

「あの、ピストルの分解をやっている時に逃げるなら、そのまま見逃がしておこうと思ったのだが——」

ともいっていた。

芝原の死体は、二見らの予想に反し、意外にはやく発見された。四、五日後に栗拾いにいった町の人たちが見つけて、身許も明らかに、「麻耶山上の惨劇」としてデカデカと新聞に報道されたのであつた。

このため三人は、立てていた神戸の駒ヶ林郵便局襲撃の計画をやめて上京した。

東京ではこの三人の他に、相沢、三井、田所等が計画に参加して、襲撃の相手を物色していたが、昭和十年の十月五日になって、目白駅に近い高田東町の高田農商銀行を襲うことが定められ、それはまず行内に二見と小林が侵入してピストルで脅迫し在金を強奪し、相沢が逃走用の自動車を用意して付近に待機するという手筈であつた。

そこで翌十月六日の午前九時半ごろ、二見と小林が行内に入ってカウンターを越えて侵入した。小林が支配人にジャックナイフをつきつけて「金を出せ」と脅迫したが、一人の行員が警察に急報しようとしたので、これを見た二見はピストルをあげて二度引金を引いたが、いずれも不発なので、二見は突差に、

「冗談だよ、冗談だよ」

といいながら、素早く表にとび出し、小林もつづいて外に走り出て逃走に成功した。

このことはその日のうちに新聞に報じられ、警視庁では神戸の麻耶山中の芝原殺害事件に関りあるのではないかと目星をつけ、全国に追及の手をきびしく綿密にひろげるに至った。身辺に危険を感じた二見と相沢は、東京から上海行を目ざして神戸にとび、そこから乗船した。戦前は外国航路の汽船の甲板の上には、いつも刑事が見張っていて、不審と見た者は容赦なく検問し、また身体検査もしたものである。二見と相沢は乗船はしたが、たまたまそれにひっかかった。二見はピストルを持っていたし、相沢も多数の実包をもっていたので、その場から銃砲不法所持取調べのため神戸の葺合警察署に連行された。

相沢が先にとりしらべられているうちに、二見は便所に行くと言って室を出て素早くそのまま脱走した。警察は、はじめ銃砲不法所持についてだけ調べるつもりだったが、二見が突然脱走したので、これは何か重大犯にかかわると見て、相沢に猛烈な拷問を加えて追及することとなる。

ついに相沢もこらえきれず、無政府共産党の存在、そのアウトラインを自白したようである。

久しぶりのアナ系の陰謀とばかり、警視庁はおどろきかつよるこんで、全国的に手配して、昭和十年十一月十一日、一斉の大検挙となった。

4

このとき検挙された者の数は約四〇〇人以上におよんだといわれる。このときは、党の組織にかかわりあった者はもちろん、自由連合新聞、文学通信等の機関紙から思想誌、文学誌の関係者まで、押収した名簿を手がかりとして根こそぎ捕えられるという状態だった。地域によってはそれらの定期購読者にまで及んだ。

日刊新聞は連日、センセーショナルに書き立てるし、批評家どもは麻耶山事件のみを特別に問題にして、解放運動としてあるまじき似而非なる所業のごとくいふらした。ヤレ、農林省の官吏に同調者がいるとか、婦女子を誘拐したとか、かわりもない報道に反道徳的興味をそそって針小棒大につづけられた。社会主義評論家の山川菊枝などが「あれは街の不良の妄動だ」と、知ったかぶりに語ったのも、この時であった。

そればかりではない。見当ちがいの評判はアナキズム陣営の一部からも立てられるに至った。

「あんなものはアナキズムでもアナキストでもありはしない。追いつめられた野犬の群だ」といつてのけることで、ふところ手をしている自分らが真個の立派なアナキストであるかのようによそおって見せる手合も出てきた。もっとひどいのもいた。どう見ても、この時の党の組織に加わらなかったことが正しいアナキストであることを身をもって証明するかのよう、ひそかに捜査に協力するかも知れない奇妙な行為をあえてする者まで、現われたのであった。その当時のことを詩人植村諦は次のように歌っている。

私は群集の中に茫然と立って
夕刊の鈴の音に聞入りながら
四方から私を包む
この名状しがたいものに心を奪われていた。

われらはこの群集の流れに抗してきた。
群集が湧立つ時我等は沈黙した
群集が前進しはじめたとき
我等はその方向の誤りを叫んだ

そしてこの数年――
群集は前進をとどめ
方向を失い
狐疑し、逡巡し
後へ後へ、となだれてきた
「情勢」、という声が耳にきこえた
その声に耳かたむけず
不可抗に抗して我等は立った
なだれに身を投げた

そして今日――
組織は破れ
同志は皆散り
私は群集の中に立つ
赤い夕焼の中の群集よ
群集よ

そして今日は群集が異邦の人にすぎないわが孤絶よ

私は一枚の夕刊を手にした

五段抜大見出し、同志の顔だ

微笑するその顔よ

あの日別れて以来始めての顔よ

わが友よ！

すべてが終った――

夕闇が私を包むように

四方から圧倒して来るものが何であるか！

流れてゆく群集よ！

群集の憎悪と恐怖よ！

赤いこの夕焼よ！

「空は赤く」

5

昭和十年十一月十一日午後三時半、植村諦は新宿駅で夕刊を買った。その一面に高田農商銀行襲撃のギャングの逮捕が大きく出ていた。

「とうとう、やられたか」

ため息とともに、二見が積極的に買って出た特務機関の活動そのものに自分が感じていた危険性が、かくも見事に現実化したことに暗然たる思いをした。責任者として党の防衛措置を如何にするか、思い惑ったが高円寺の家にかえり、早い夕飯をとっていた。新聞を見てやって来た友人の岡本潤もともにいた所に、十数名の武装警官がなだれ込んで来た。

麻耶山の殺人、高田農商銀行の襲撃と重なって、党関係者のピストル所持が予想されていたのだから、警官隊の物々しい襲撃も無理ないところだったであろう。植村とともども岡本もその場から引き立てられた。

東京ではその夕刻から夜半にかけてアナキズム系と見られた者たちは一斉に検挙された。党員も非党員も区別がなかったが、さらに検挙は地方にも及んで、総数四〇〇人に及んだ。

このときの検挙からだ一人まぬかれて、逃走をつづけた二見敏雄は、その彼が重大な犯人であったためになされた全国的な指名手配の網目をくぐって、以後約五十日間、検察陣を手こずら

せた。二見が信濃のどこかにいたと伝えられ、今日は四国に現われたと、興味本位に新聞は書き立てた。それは後に知られたことだが、二見は最後のねぐらを川崎市の土工部屋にもぐり込んでゆうゆうと毎日をすごしていたりした。

昭和十年十二月二十四日、クリスマスイブの人波が氾濫する銀座街頭を二見は、かつて黒色青年連盟のボスといわれた某とともに歩いてた。うす化粧してマスクをかけポケットにピストルを持って、人波をたのしむかのごとく歩いていた。西銀座の二丁目あたりを歩くとき二見は気づいた。某が頭上に手をかざすようにして僅かにゆるがしつつ歩きつづけているのを。そのときは深く気にもせずにいたが、後になってそのことが妙に気になった。それは彼が逮捕されてからのことである。二見は銀座二丁目の角を曲がったところで靴磨きの台に片足をのせて靴を磨がかせはじめた。

このときのことを、そのころの警視庁関係者はこう語る。

その夜警視庁はA、B、C、Dの四班（各五人）の捜索隊を出して銀座通を警戒していた。銀座四丁目の角を曲がったところでA班の二見を発見して同僚にささやいた。「あつ二見だ。二見がいるぞ。」五人は近よりつつ尾行したが、二見がピストルを所持していることを思つて、うかつには手が出せなかった。二見は靴磨きの台に片足をのせたときも、右手はポケットの中でピストルを握りしめている。忍びよった刑事の一人がその腕の上から抱きつく、と同時に他

の者たちが折り重なるように二見を押えた。この二見を最後に無政府共産党員全員が検挙されたのであった。

無政府共産党はこの時組織に費した約二十年の後、活動がその緒にいたばかりというべきときであった。その肝心の党活動がまだまだの時に、特務機関の独走から破綻し、あつけなく終りを告げたといわねばならない。しかし一部のアナキストや批評家などがいったように、児童的な無暴な行動として党そのものを葬り去ることができるだろうか。

具体的には犠牲のみ出でて何を活動し、何を残したということではなかった。世を挙げて日本が戦争に傾斜する一方で、人民的民衆的な生活の自由の一切が、天皇と国家の名の下に、まったくますます犠牲にされようとする時期に直面していた。ある者はそれに追従し、ある者は諦観し傍観しあるものは反抗を内部にかくして現わさず、という時代風潮に抵抗しようとしたことを評価されずにおくべきではあるまい。この結果だけを合理的な批評の対象としかなし得なかった人々は、あの当時の情勢にたいして、行為行動はもちろん、何の意志表示もできなかった怯懦で非良心的な者であったとしかいえない。

無政府共産党事件はその検挙の翌年、といっても三カ月半の後に二・二六事件が起こり、ために党関係の審理が遅れて、留置場と未決との五カ年を経て昭和十四年二月十日に判決となった。

二見敏雄、無期。相沢尚夫、十二年。植村諦、入江汎、七年。小林一信、井上信一、十二年。

寺尾実、五年。その他三年、二年、一年と全員下獄した。

この間に進んだ戦争のための徴用や召集で田所茂雄、伊藤悦太郎は戦死した。

植村諦は判決のとき裁判長の間に答えて

「われわれは敗れて捕えられたのだからもう実践はやらない。しかし、われわれの思想の方向に国家や人類が進まないならばこれは破滅に向かうものである、という考えを変えることはできない。国家の暴力をもってしてもそれを如何とも出来ない」と語ったという。

〈注〉

(1) 昭和六年の芝浦製作所争議のとき自連は全力的に応援したが、共産主義系、社会民主主義系の応援と足並が揃わず争議が敗色を濃くしたとき、二見敏雄、寺尾実、牟田正紀、小野長五郎等が、かねて千葉県の前記海岸に埋蔵してあったダイナマイトをもって工場、重役邸等を爆破して争議を有利に導こうと企画したが、争議団の急屈服により中止、ダイナマイトはこのままにしてあった。

(2) 軍事局、財務局、特務機関の設置を主唱した二見敏雄がこれら機関の責任者となったが特務機関は中央委員会の埒外におかれた。ここに後に派生した党の弱点が生まれた。

編集部注 真木泉Ⅱ植村諦の回想は「回想 黒旗は破れた！—無政府共産党事件—」と題されて、アナキスト連盟機関紙『自由連合』一一五号—一二九号に連載されたものである。本稿は未定稿と思われる、重複部分や誤記が散見される。収録に当たり、明らかな誤記は訂正し、極端な重複部分は削除した。